大正モダニズム建築の粋を見る ③

「あめりか屋」

創建当時（大正9年）、二葉館は、文化のみちエリアの北端、東二葉町（現白壁三丁目）にあり、2000坪を超える敷地に建てられた和洋折衷の建物は、その斬新さと豪華さから「二葉御殿」と呼ばれ、政財界人や文化人の集まるサロンでした。

当時、慶応義塾の先輩である矢田績に招かれ、「名古屋電燈（株）」の取締役に就任した桃介は、木曽川での水力発電を進める為に名古屋に拠点を構え、事業パートナーとして貞奴を呼び寄せたとも言われています。※

設計は、新進気鋭の住宅専門会社「あめりか屋」に依頼し、建物内部に驚くべき電気装備が施される一方、貞奴の好みも至る所に取り入れられました。

「あめりか屋」は橋口信助により明治42年に東京に創設されました。30代でアメリカに移民してシアトルで店を開いていたという橋口は、屋号に直接用いたようにアメリカへの傾倒振りは大変なものがあったようです。

橋口は、子供の時に父親から畳に座る時、足を横に出すと厳重に怒られて、それで畳に座ると云うことほど嫌なことはなかったそうです。

アメリカから帰国の際に、新しい事業のためバンガロー式の組立住宅を輸入しました。これは床座で家長中心で接客本位の伝統的な住まいを椅子座で家族を中心とした家族本位の住宅に改善しようとする、当時の生活改善運動と連動し「あめりか屋」の事業は大変注目されました。

大正期には東京だけでなく大阪や軽井沢、そして小倉に出張所が作られ「あめりか屋」の住宅は一世を風靡しました。

全盛期の大正7年には、名古屋に臨時出張所が設けられて、その住所がまさしく「名古屋市東二葉町18番地川上邸内」で川上貞奴邸建設のために設けられた工事事務所でした。

その建築は西洋館に伝統的な和室を取り込んだ「洋館単独和室吸収型住宅」で、大正9年頃に建設された川上貞奴邸は本格的な西洋館の背面に和館が付いています。このことから明治初期に出現した「和洋館並列型住宅」から「洋館単独和室吸収型住宅」へと移行していく流れの中間的なものとして位置づけられる住宅であるといえるようです。

参考資料／内田青蔵著『あめりか屋商品住宅「洋風住宅」開拓史』

※矢田績／のちに「中部財界のご意見番」と呼ばれる矢田績は、複数の企業を経て、三井銀行に入社した。そして、数々の支店長を歴任した後、営業不振の名古屋支店の立て直しのため来名する。彼は名古屋の地に永住し、経済人・文化人が自由に話をする場所として自宅（地名から撞木町倶楽部と呼ばれた）を開放した。また、自費を投げ出して名古屋公衆図書館（現西図書館等）を設立した。まさに、「名古屋経済の基礎を築いた経済人」である。

書庫棟から

文学ボランティアの楽しみ

文学ボランティア　鎌田佳子

二葉館の文学ボランティアに登録して、一年が過ぎた。月二回、書庫棟での寄贈本や資料整理の作業が、楽しくて仕方がない。

例えば城山三郎さんのメモや新聞・雑誌の切り抜き、手紙などに触れると、生前お会いしたことがない私でも、身近に接した心持ちがしてくる。

二階展示室文学企画展の準備も、書庫棟の空気を熱くする。金子光晴さんが津島出身だなんて！岡井隆さんは少年時代、白壁界隈に住んでいたんですって！

知らなかった……

そして何より楽しいのは、ボランティア仲間とのお喋りだ。作業しながら、またお弁当を食べながら、映画や演劇の事、本の事、名古屋の街の今昔……、世代の違う方々のお話に興味が尽きない。

祖父母から数えて三代目の名古屋人である私だが、名古屋にあまり関心がなかった。そんな私がボランティアをきっかけに、名古屋に愛着を感じ、名古屋人として進化し始めている。

文学ボランティアの方々の作業風景

書庫棟内

BOOKS 二葉館・文化のみち関連本紹介

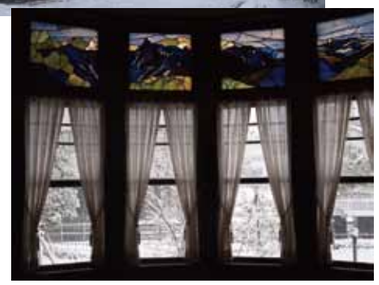
図書館などで読むことができます。

『清須越　大都市名古屋の原点』
清須越4百年事業ネットワーク 編著

中部ペンクラブ文学賞特別賞受賞
『城山三郎伝
昭和を生きた気骨の作家』
西尾典祐著　発行 ミネルヴァ書房

四季の移ろい

三色桃（花桃）の写真



二葉館の雪景色

花開いた三色桃（2009年6月関西電力より苗木を贈られる）

文化のみち逍遥 その五

【東海学園大講堂】東区筒井

講堂とは、もともと仏教寺院の建物の一つであり、教典の講義や説教を行う場である。激動の時代を生き残り、数多の若人を優しく見守ってきた建築物、それが東海学園大講堂である。

今もなお色褪せないその存在の背景を探ると、東海中学・高等学校に関わる“縁”の糸が見えてくる。もともと昭和三年秋に行われた昭和天皇即位大典を記念し、教育活動を振興させるため、講堂は建設が企てられた。当時、講堂の建築を担当したのが、愛知県営繕課である。その中でも、中心となったのが、旧制東海中学校の卒業生であった酒井勝、大脇高勲、宮川只一だ。当時酒井は営繕課長として、また工事責任者としてこの事業に関わっていた。（余談ではあるが、酒井が営繕課長であった頃、意匠担当として県庁表玄関等の設計に携わっていたのが、同じ旧制東海中学校の卒業生であり、建築家黒川紀章の父、黒川巳喜である。）大脇はこの大講堂以外にも、名古屋赤十字病院の建築に携わるなど、名古屋を代表する建築物に関与した人物である。そして、宮川に至っては、当時の愛知縣第一中學校（現在　県立旭丘高等学校）の新校舎設立の際に、技師として関わっている。しばしば比較されることの多い「東海」と「旭丘」であるが、その代表的な建築物に同じ人間が関わっていたことに、改めて因縁を感じさせられる。

その後、建設は順調に進められ、昭和六年九月に仏式の開堂式、同年十一月に落成式を挙行し、完成を迎えた。

現在、文化祭（九月祭・記念祭）、そして年に二回行われるサタデープログラムなどの行事では、東海中高の関係者以外の方でも、入堂することが可能である。特に、文化祭では東海名物の1つである「カヅラカタ歌劇団」が毎年上演され、入場整理券を求め長蛇の列ができるほどである。

「学び」とは、教科書に書かれたことを得るだけのものではない。生きること自体が、学びの連続である。八十年の歳月を経た今も、そしてこれからも、この講堂は、沢山の“縁”の糸を紡ぎ、「学び」の精神を継承していくことであろう。

東海中学校教諭　島田尚幸

DATA
東海学園大講堂
■名古屋市東区筒井一丁目2-35
非公開。但し、東海学園行事催行の場合等のみ、入場可。